

# 症例を通して学ぶ「自己の病」

～ 関係性交流分析による症例集 ～

杉田 峰康

福岡県立大学名誉教授・同大学大学院講師  
日本交流分析学会理事長

# 症例を通して学ぶ「自己の病」

～関係性交流分析による症例集～

## 目次

1. ベアトリスの物語（1）	2
2. 自己感障害としてのベアトリス	4
3. エステルのケース	6
4. ジョンのケース	9
5. ジョナサンの症例：性愛的転移	12
6. ブリーフ・セラピーとしてのTA（ジョアンナのケース）	21
7. 続編・ベアトリスの物語（2）	28

## ベアトリスの物語(1) (ハーガデン&シルズ『交流分析』P.14~22)

### ～ 従来のTAの不応例 ～

患者：20歳半ばの女性。ほっそりして魅力的、はきはきした女性。概観：妖精のよう。

初回面接：強い不安。セッション途中で立ち上がって帰ろうとした。しぶしぶ戻る。

Thに起きた反応：「すずめ」のイメージ。「小さなすずめに餌をあたえているよう」

自分の中が変わり始めた。孤立感と好奇心↑ 母性が揺り動かされる。不安と動揺。

“アンビバレントな不安”

主訴：男性との別れ。喪失感、「よりよい人生を送りたい」

家族歴：義父、母、兄2人。実父はPtが5歳のときに家を出る（“見捨てられた”）

母親：男性関係を繰り返し、気分屋で暴力を振るう現在の義父に落ち着いている

Ptを大事な子としてケアせず、きちっと面倒を見ていない

義父たちと兄たちのイメージ：屈辱的で恥ずかしい男、迫害者、女性蔑視、いじめっこ

Thの患者像：「存在を軽視され、愛されずに育ち、自分のことばかり考えている娘」

TA診断：

ドライバー：完全であれ、強くあれ、他人を喜ばせよ

禁止令：自分であるな、感じるな、近づくな、考えるな、重要であるな、成長するな、  
子どもであるな、成熟した女性であるな

### 治療経過

#### I. グループ療法の時期

Thの意図：Ptが望んでいるものを手に入れることができるだろう

脅威の少ない女性のグループなら安心。違った生き方を求めて悩んでいるのは自分だけではないと学べる。AとNPを育てるのに役立つだろう。

治療グループはPtの自尊感情と能力についての再決断の場になるだろう。

Ptの脚本の思い込みにチャレンジすることにつながるだろう。

契約1：感じたまま行動する前に止まって考える

効果あり……ラケット感情↓、怒り、悲しみの表出。Aの成長↑

契約2：積極的に退行する

イムパス：自分は価値がない（自己感）

技法：エンプティチェア……自己 vs 実父、義父のイメージ（再決断）

Thの疑問：Ptは周りとのつながりの感覚の維持ができていない？

契約3：皆のコメントをよく聞き、自分が得たストロークの経験を話す

結果：「誰も信じることができない」「抱きしめて欲しい」

契約4：抱きしめられることについて

以下の場合自分がどう感じるかを自分に知らせる責任を負うこと

- 1) 自分がじっとしていたいとき
- 2) 自分が動きたいとき
- 3) 抱きしめられているとき

Pt：「自分が何を望んでいるかを直観したら知らせて下さい」

(値引き、過剰適応?)

契約5：責任は双方が負うもの(魔法の解決策)

Th：「抱きしめること」についてのやり取りに疑問

Pt：Cへの退行……無力感、失望、悲しみ、行き場のない感じ、自己嫌悪、自己憎悪、つまらなさ、だるさの表出

PtとTh：個人セラピーの提案と受容

## II. グループ療法と個人療法の併用の次期

問題：仕事に対する態度……間違った仕事では？ 転職したい。

対応：仕事をめぐるいくつかの契約

結果：転職についての思考、感情の表出

新たな問題の顕在化：「私には人間関係を築く能力が明らかに欠けている」

Th：「汚染解除」のプロセスは進んでいる。社交的、魅力的なPtとしては不可解？

グループセラピーで肯定的なフィードバックがもらえるだろう

現在の交際相手の男性との関係(遠距離恋愛)によって、満足な異性関係を手に入れて欲しい

結果：特定できない不満の訴えつづく。男性との離別、転職困難など

Th：「問題はPtが本当に必要なことについて決断できていないためだろう」

新たな膨大なラケット感情、思考、行動との対決

結果：効果、変化なし

Pt：治療における抑うつ感と不安の訴え

## III. 治療関係の吟味と検討

- ・Pt：Thの判断、能力への非難……身体症状の出現、契約の不履行、「行き場のない囚人のようだ」、「再決断は役に立たない」、自己嫌悪、自己無価値感、自尊感情の低下
- ・しかし、「治療をやめる」とは一度も言わない
- ・Thの反応：1) 混乱 2) Th・Pt間のアタッチメントの形成
- ・Thの気づき：アタッチメントの形成こそが治療の最も大切な特性
- ・Thは治療中に変化し、自らのCの汚染を解除した。それがThの変化をもたらした？
- ・ワークを少なくして、Ptとの関係を重視するようになるとアタッチメントが形成された。テクニックを使い果たしたとき、アタッチメントに価値を見出すことができた。

## 自己感障害としてのベアトリス

### 困惑した問題

- ・ TAには自己に関するしっかりした理論がない
- ・ 自己の中核的感觉と自己のイメージをはっきりと区別する理論 (Stern)
- ・ Cの自我状態に対する心理療法の意味
- ・ Th ははじめどのように進めてよいか途方に迷ってしまった

### 1. 中核自己感 (P. 28~29)

- ・ 母親に関する仮説：若い、自分中心的、不安定（記憶によると“冷淡”、毎回そうではない）
  - ・ 赤ん坊時代に長時間一人で置いておかれていた（母親が認める）
  - ・ 父親：未成熟、父親は支持的ではなかった
  - ・ 想定：ベアトリスは情動の調律に恵まれていなかった  
自己が不安定→屈辱、恥じ、虚しさの体験
  - ・ Th：治療の最初の段階でこれらの体験と感情をラケットと診断
- 結果：Aの汚染解除の手段はPtの心を根本から動かすことはなく、意味ある方向には変らなかった
- ・ Ptの意図：自分が重要で配慮されていると感じるためにセラピーを使っていた（初体験）
  - ・ 意味：PtはC<sub>0</sub>の体験（欠損、語調、切望）へと深く触れていく

### 2. A：言語的・間主観的自己 (P. 35)

- ・ Ptは内的体験につながっていない間は落ち着いている
  - ・ Thが最初の面接で自分自身のイメージ(A<sub>1+</sub>)と直接対決するとき、Ptはそれらの感情を避けようとした。例、不安、傷つき、切望
- ・グループ療法に参加する意味と効用
- 機能：コンテイング、受容、ミラーリングを提供する  
積極的な退行、相互の感情の理解を当然とする
- 効用：Ptは自分のペースで動ける  
自己イメージが直接脅威にさらされない  
C<sub>0</sub>の感覚に落ち込むことはない
- 結果：Ptは長い間、自己イメージを傷つけられることなく過ごした  
内面で感じていた疎外感から隔離されていた  
中核的感觉（虚しさ、抑うつ、悲嘆）にカセクトする必要はないと確信したか  
A<sub>1+</sub>の中のOK感を強め続ける
- ・ グループはPtの奥にあるもの（抑うつ感）をかすかに見る → Ptが個人セラピーに

入る覚悟と意欲の後押しをする

### 3. P<sub>1</sub>: 内的対象表象 (P. 37~38)

- ・ Pt : グループへの投影「話を聴いてもらえない」「世話されない」
- ・ 個人セラピーを受ける決断 (母親による育児の取り入れの影響?)
- ・ Pt : 魔法の解決策の期待 → 注意!
- ・ 意味 : 文字通りの具現化によって何を避けようとしているのか?  
例. 生々しい原初的痛み : 表現されなかった悲嘆、痛み、捨てられる恐怖

### 4. セラピーの実際 (P. 41~42)

- ・ Th の役割 : 温かさ、共感、受容、保護的な環境を与える。とくに保護的環境  
Pt が引き出した母性的反応を行動化しない  
Pt の期待には何らかの魔法的思考があると認識している
- ・ 最も重要な共感的関係 : 右脳-右脳関係 → 治療を転移関係の領域に位置づける
- ・ Th は自分のセラピーで自らの C の混乱を解除する → まずは自分の「自己」になる

### 5. 退行 (P. 67~68)

- ・ Pt は最初のセッションで大きな脅威を感じたので、途中で立ち去ろうとした。
- ・ この自己イメージから Pt を誤解した。  
内的にどれほど退行しているかに気づかなかった。

### 6. 理想化逆転移 (P. 92~93)

- Th の Ph への調律 → 理想化転移 : 例. Pt の安全で受容的な心理的距離の要求 ↑
- Th : 自分で Pt に直面 → 効果なし、行き詰まり → 転移への気づき  
例. 理想化の強さ = Pt の脆弱な自己像の程度 → 洞察 → Pt の偽りの自己
- Th : Pt の脆弱な自己感の程度 (何が本物、何が誇大なのか) は難しい
- Th : Pt の自己感を育てる、息を吹き込む必要
- Th : 患者からの「違ったやり方で反応するように」の要求 → Th の驚き  
自己対象転移の中には同一性の感覚がある → セラピーに現れる  
Pt は最終的には Th と敵対する立場へと移行せねばならない (個体化の必要)
- Th の喪失感は母親のそれと似ている (?)
- ・ 成熟 : 母親をもはや全てのよきものの源とはみなさない

### 7. 対決 (P. 172~173)

- Th : ある種の対決をしばしば用いている
- Pt が Th とセラピーを執拗にディスカウントしていることの指摘
- Th : 慢性的な空虚自分が満足を感じることができるのだ (事実確認)  
→ 自分が満足を感じることができるのだ (事実確認)

## エステルの場合 (ハーガデン&シルズ『交流分析』P. 99~105)

### 分裂した陰性転移の例 (援助職についてのことのある Pt)

患者：女性。援助職についてのことのある Pt

主訴：男性以外の多くの人間関係がいつも悲惨な結果に終わる、摂食障害

生育歴：一人っ子。母親は侵入的、残酷なほど合理主義的、父親は精神的に衰弱。

従兄から性的虐待をうけた

Th の印象：生育歴から情緒的に健康な関係を剥奪されている患者

- ・自己対象転移には気づいている (ミラーリング、理想化、双子的局面)
- ・「何かが正しくなく自分が神経質になる」

Th の反応：Pt の背景の恐怖に共鳴し、共感的関係はできている (根底に怒りと不安)

### とどろくような怒り (P. 99)

Pt：「セラピーの時間を変えてほしい」

Th：いくつかの選択肢の提案

Pt：ことごとく拒絶 (Th の休診日を提案してくる)

「次回のセッションを 20 分遅らせてほしい」 (Th：同意する)

Th：セッション後、急激に不快感がこみ上げる

自己分析：Pt の要求に合わせるのに何故大変な努力をしたのか？ 私は威嚇されている。

気づき：Pt は強い怒りと不安を抱いている。私は Pt の感情を長い間避けてきた

### 愛の傷、憎しみの傷 (翌週) (P. 100)

Pt：電話でセッションのキャンセルを伝えてくる → (静かに聴く)

Th：(転移の自覚、逆転移の分析、2 人の間の緊張感)

Pt：「先生はあんなに苦労したのに私が来なかったことで怒っていますか？」

Th：「あなたは私に怒って欲しいのですか？」 →

Pt：「そうではありません」

Th：「私に怒っているのではありませんか？」

Pt：「いいえ」

Th：「この前、あなたに合わせるができなかったらどうなっていたでしょう？」

Pt：ぎょっとして激しく怒る (顔は紅潮、目が飛び出しそう)

Th (想像上のシートベルトを締める)：許可：怒りを現わしてもいいのですよ

Pt：なぜか私は Th の心理的な強さが増したのを感じました

結果：セラピーの方向性が大きく変わる

## 深海 (P. 101)

Th : (Pt の否定の対象になる)

Pt : 「先生のセラピーの××の点が役に立たないのです」 → 夢「Th は無能な人物」

Th の自己分析 : 転移の性質の完全な理解まで続く

- ・ ①これまで温和で忠実だった Pt、②治療面で「理想的」対象だった自分、③「効果的」対象としての自分など、多くを失った
- ・ 自分の憎悪とむかつきは Pt の背景から取り入れられたもの (完全に無視され分裂排除された Pt の早期体験の一部も含まれている)

## 「ブルーにこんがらがって」 (P. 101)

Th にとって必要な学習

- ・ Pt が従順であって欲しい願望、共感に浸る習慣を放棄すること
- ・ Pt を客観的に嫌うことを学ぶこと (ウイニコット)
- ・ 自己分析 : 自分の子育て時代の思い出 : 「わが子は要求がましい、憎むべき存在」  
「私はわが子を傷つけずに育てるべき。愛を抱いた瞬間が必ず戻るから待とう」
- ・ 生育暦の推察 : Pt もかなり難しい子どもだった? 周囲は彼女を傷つけ、辱めた?
- ・ Th : 「自分を防衛せず、私に対する Pt の不満をていねいに聴けるようになるろう」  
(Pt の情動体験から目を離さないことを学ぶ)

## Pt の背景に 3 つの段階がある

第 1 段階 : Pt が Th の欠点をくどくどあげつらう段階

- ・ これらの人格的問題は Th が Pt について観察したものと正確に一致している  
(Th に何を聴けば傷つくか知っていた : Pt は援助職についていた)
- ・ Pt がどのように生育、成長、変化してきたかについて尋ねることを学んだ
- ・ Pt の変化・成長過程をみせていたことにやっと気づく → 2 者間のプレッシャーが減る

第 2 段階 : Th が強い不安を感じる段階

Th : 底にとどろくような不安を感じ「今、何が起きているのだろうか?」

意味 : 変化へ向けての別の道しるべ

Pt : 「セラピーは終わりだ。治療はうまくいかない。Th は役立たず。症状は悪化した!」

Th : 苛立ち ↑ (Pt が自分を忍耐の限界へ追い込んでいるようだ? その意味は何か?)

Pt 抜きの生活を想像し、「あの時のほうがずっと快適だったろうに」

第 3 段階 : 対決の時期

Th : 自己の反応分析 → 「もっと対決を迫る方法で介入する時期にきた」

冷静・確実に「Pt と私の中にイムパスがある」と確信し、提案に踏み切る

Th : 「私はセラピストとして、あなたとともにこの行き詰まりを打開する適役でしょうか？ 私はそう考えます。しかし、もしそうでなければ、今日でセラピーはおしまいにしましょう」

### 成人と成人が会う島々 (P. 103)

Pt : 「よく考えた結果、セラピーを続けることに決めました」

(当惑さみ、目のきらめき)

Th : (Pt に対する愛情の念がわく—かんしゃくの後で子供と助け合える親の気持に似る)

セラピーの雰囲気 : 協力的

Th : 共感的共鳴から対決へのスタンス (正しい介入の選択と思う)

ウニコット : Th は自分の中の実際に存在する憎悪を否定してはならない

→ 将来の解釈に使えるよう、選り分けてしまっておくこと

### まとめ (P. 104)

- ・ 憎しみの感情に耐えた → 次の介入まで憎しみの反応をコンテインした
- ・ ウニコット : 「Pt が実在の or 正当な憎しみを求めているなら、それに手が届かなければならない。さもないと実態ある愛にも手が届くと感じられない」
- ・ 本症例は、逆転移の分析が Th の「憎しみに満ちた」感情をもっと顕わにするための道を正確に示した (Pt の無意識からのサインに注意！)
- ・ 例. Pt : 「変化の時です。何か違うことをして下さい。私が嫌われているのだと教えて！ そうすれば私は愛されていると感じることもでき、自律へ向けえ変化できるでしょうから！」

Pt と Th の OKness 維持へのこだわりについて

- ・ 自己理想化 (Th は理性的、客観的、感情から離れていられる) は、世代継承的な乳児的理想が自己愛的に注ぎ込まれたもの (Racker)
- ・ Th と Pt の I+、U+維持へのこだわり = 誇大な期待が形を変えたもの  
自ら成熟した機能の模範となる期待 : 「危険な領域」(憎悪)で情緒的に反応することを求められる例では、治療的有効性を失ってしまうであろう (Winnicott)

### 内的対象生活が葛藤に満ち、抑圧、分裂されているケース

- ・ 唯一の回復への道 : 原初的感情を修正したものを投影し、再取り入れを行うこと
- ・ Th は内的取り入れと同じくらい効き目のあることを、口に出して言わねばならない、しかし → 変容逆転移の領域へ

## ジョンのケース (ハーガデン&シルズ『交流分析』P. 108~113)

### ～ 投影同一化のケース ～

・Pt を発見するためには私たち自身の内側に Pt を探さねばならない

主訴：徹底した分析といわれる治療を受けてきた。TA セラピストに会って「ちょっとした整理ができれば」

生育歴：Pt の話から

- ・アタッチメントが深刻に損なわれた残酷な乳幼児と児童期。両親は赤ん坊をロボットのように扱ったらしい。4歳まで福祉サービスを利用（長期間親戚のもと、寄宿舎で過ごす）、それ以降は残酷、いじめの歴史。30代の初めに発症、長期にわたるセラピーを受ける。Th にとって数回の自殺企図が気がかり。最近の自殺意図は2、3年前、セラピーの終結期の矢先

印象：背が高い、体格がよい、自信がありそう

### 段階設定 (P. 109)

Th：「残酷な生育歴を聞いて、幾分気の毒に思った」

「Pt から自分が無視され、最蔑され、さらに非難されたような気持ちになった」

「バランスを崩した感じだが、その意味が分からない」

Pt：「以前のセラピーに感謝していますし、今回の治療の計画に取り掛かる準備もできています」「ビジネスは成功、妻は愛らしく愉快的な人柄でした」

：「整理したいのは感情面のことで、自分におかしなところがあると思うのです……」

(混乱と怒りがつづいて非難され、屈辱された体験：そのとき「傷つきやすくなり」暴力的に振舞った)「これは自他にとって危険なことでした」

Th：「あなたの気持ちがよく理解できます」(Pt の感情を自らも感じる体験から)

(3週間後の仮定：もろい自己感の持ち主)

Th：「個人とグループのセッションに1度ずつお出でになれるならセラピーを続けますよ」

Pt：「それはとても難しいでしょう」

Th：「これが私の提案です」(Pt はかなり退行している、心配だ)

### 私があなを傷つけるように、あなたに私を傷つけて欲しい (P. 110)

Pt：「先生に脅されている感じだから、グループに参加しません」

(グループ・セッション)

(次回) 怒り

：「前のセラピストは境界線(決まり)にこだわる堅い人で不服でした。「事実、かって私と交渉した人はいないのです」

Th : 「私たちは契約について話し合しましょう」

Pt : 「これまでの経験から長たらしい契約に縛られるのはごめんです。私は決まった勤務体制のない仕事をしているので、先生にも柔軟で臨機応変の治療をしていただきたい」

Th : 「あなたの言われることは論理的です。そういう契約を受け容れましょう」

Pt : 「では3週間後の予約をキャンセルしてください」

(元の予約の1週間前)

Pt : 「キャンセルした予約をもとにもどせますか？」 → Th は同意する

(当日、Pt 現われず。Pt の妻から、Pt が「自殺する」とのメモを残して行方不明との連絡があった)

Th : (やきもき、自己非難、記録を何度も読み直す)

Pt : (2週間後に来院)

Th : 「これまでどうしていたのですか？ 奥さんから自殺のメモのことは聞きました  
が……」

Pt : (あまり話そうとしない)

Th : 「私は恐れ、心配しました。何が起こるか思いをめぐらしました。……私の話を聞いてどう感じますか？」

Pt : 「先生は私に怒っていますか？ ……なぜって先生がとても恐いので……」

Th : 「いいえ、私は自分に怒っているの！」

(残りの時間話つづける)

・自分自身の不安、絶望、心配を使って、Pt をどんなふう理解したかを述べる  
(Cの解釈)

「あなたは自分の欲求不満、怒り、悲しみ、恐れを伝えることが全くできていないので  
す」

「あなたは内心の気持ちを聞いてくれる、どこかにいる誰かを待ちこがれ、必要として  
いるのです」

Pt : (安堵) 「どうやってそれを知ったのですか？」

Th : 「私はあなたに境界線を維持するよう主張すべきだったのです。私は、あまりやすやすとそれを手放してしまったのです」

「あなたは治療を望むなら、週2回男性のGTに参加する必要があります。もし私との治療を続けたいなら、自殺しない契約を結ぶ必要があります」(escape hatch)

・本症例は幼児期、また他の2者関係でも許されなかった情緒的体験が自己感から切り離されていたケースである

## 内省による考察 (P. 111)

- ・感情による防衛は、転移関係において現われ、逆転移を通して Th によって取り上げられる必要がある
- ・Pt が自分の苦悩を Th に渡せる唯一の方法は、Th に同じ絶望感を感じさせること
- ・Pt の予約のキャンセルを元に戻す行動（無意識）は、Th に絶望感を感じさせるためであるかのように作用した（＝ 投影同一視）

Th の気づき：(Pt の体験を初めて真に理解した。これが問題の源に行きつく唯一の方法だったのだろう)

Pt：「Th が契約と境界を強く主張したら、私は治療を辞めるつもりでした」

私は Th に厳格な両親と異なるように振る舞うことを要求したのです」

Th の気づき：(私はいつもの私からぬことだったが、説得されて自分の正常なやり方を曲げると認めた。私はルールを破り、Pt に操作されるのを許したのだ)

- ・投影同一視には Th に変化を強いるものがある
  - ①Th は正常なやり方から逸脱した
  - ②Th はそうしたいと思った

Th を変化させようという Pt の要求に乗らないかぎり、どんなセラピーも始まらない

## オグデン

- ・Pt の内的世界に関する豊かな情報源を得る
  - ①Th 自身が人間関係のプレッシャーによって型にはめられることを自分に許す時
  - ②その変化を自分で観察できる時
- ・Th に課せられた役割には、Pt にとっての新しい対象関係の体験が含まれている
- ・Pt は誰かにこれをしてもらう必要がある
- ・Th は知らぬうちに、Pt の対人関係のドラマの役者になっており、自分の演じるべき役割について、舞台上の指示を Pt から受ける

## 何がこの治療で変容的だったのか？

Th・Pt 間の絆の形成を意味する何かが起きた → 境界の復元 → 初めての感情を表現 → 「希望」

Th：Pt を自分の「自己」の中に取り入れ、感じ、考え、整理してワークスルーし、初めて Pt と交渉するリスクを引き受けた→絶望を希望へと変容させることにつながった

## ジョナサンの症例: 性愛的転移 (ハーガデン&シルズ『交流分析』P. 120~135)

- ・ Th は転移関係に中でいかに愛が歪んでいったかのユニークな物語
- ・ 逆転移を創造的に分析することの中に創造的な可能性が内在し、それによって早期の熱望や憧れを成人の成熟した愛に変遷させえることができる

### セクション1: Thの涙 (P. 120)

#### 初回面接

Pt (ジョナサン): 5年にわたる精神分析をやめた後に Th を受診

知り合いからの紹介: 「対面法で関係性的アプローチの治療を受けては？」

主訴: 「イムパスから脱したい、女性との関係を維持したい、今より良い感じを持ちたい」

Thの椅子の近くに座る: 「抑うつ的」。 (怒り明らか)

Thの反応:

- ・ 厳しい表情: Pt にとって自由連想法がどんな体験だったのだろう。私 (Th) とのアイコンタクトから養分を得ている感じだ。

Pt: 「私は前の女性 Th に支配されてきたような感じなのです」 (怒り明らか)

Th: 「(敵意の処理のために前の Th に戻る方がいいのではないかと提案しようか?)

いや、それは1つの考えにすぎないと説明しても、このPtは私の介入を「支配」と感じるだろう)

#### 初期

Th: (前のThに共感できる。どうも私はPtに支配されているようだ。このPtは治療関係の中で何も提供しない。彼はうつ状態のようだが、恐らく攻撃性の抑制と頑固さのためだろう)

Pt: 「私は最初の妻を他の男に取られて失い、数年前には幼い子どもたちも亡くしたので。それはとてもつらい別れでした」

Th: (どうもこのPtとは意思の疎通がとれない。こんな悲惨な出来事に、よくも心を動かされずにいられるものだ)

Pt: 「私は今、職場の年下の女性にとっても惹かれています。彼女は私より15歳下ですが…… (ひどく性的に描写する)」

Th: (彼にとって彼女は単なる性的対象なのだろう)

(その後、Ptは彼女と付き合い始める。印象: 無感情的な性関係、愛情の欠けた付き合い)

Pt: 「彼女にはうんざりしました。彼女を傷つけたい気持ちが怖いのです。彼女の要求がましさがイヤなのです」 (指で耳掃除をする癖をみせる)

Th : (私なら決してこんな男性 (Pt) に惹かれることはないだろう。耳掃除を止めさせた  
い治療は困難になりそうだ)

(彼女と別れた後の面接)

Pt : 再び結婚の失敗、子どもの死について詳しく話し始める

Th : 涙が溢れる (自分でも驚く反応)。彼の喪失と悲しみを聴くとむせび泣きしかねない  
「この涙は、あなたの中の悲しみを伝えていると思うのですが、どう思いますか？」

(本音の告白)

Pt : (これまでよりも感情的) 無言でうなづく → セラピーの転回点

Th : (ああ、これがセラピーの転回点になる瞬間なのだ) → Th と Pt : リラックスする

Pt : Th (私) に対する信頼感が増す

Th : (問題の最初の打破には、私は自分自身でなくてはならない。Pt はまず自分の問題を  
認めるためには、Th の中にそれを見出すことが必要なのだ)

## 考察 (反省と議論)

契約について

・ 社会的レベルで開始 : 疑念と困惑が生じる (Pt の表情、解離、生育歴、抑うつ、など)

Th : 5年間の精神分析で Pt は C の混乱解除を行ってきたのだろうか？

Pt の契約を受け入れよう (女性との膠着状態の脱出、Pt の望み、目標達成の方法)

・ 言外レベルでの展開 → 言外レベルから探索 (非言語的交流)

Pt : 新生児の「厳しい」凝視 (エリクソン) :

Th : Pt の表情に支配されている、お返しに何かする運命にある？

・ Th の共感欠如と嫌悪感 : 乳児期の母子関係の再現

Th : Pt は愛の要求に対し愛情のない P<sub>0</sub> の経験をしている

Pt : 絶望的な愛の形を演じ、不満から嫌悪を感じる性的対象として女性を描写してい  
る (投影)

Th : これが Pt の存在の核の部分で起こっていることを伝える方法だったのだ。

Pt : (私は孤立、愛情の無い欲望を演じることで、女性に対する深い敵意と憤りを表わ  
しているのです)

「発達モデル」からの考察 (フェアバーン、ガントリップ、ウイニコット、コフトら)

・ 本例は共感的な情動調節の失敗によって生じる成熟した愛の発達の問題を提示してい  
る

・ Pt には愛情豊かな自己対象表象 (母親) がまったく見えない

・ C<sub>0</sub> → P<sub>0</sub> の基盤に必要な絆が欠如の状態 → 絶望、自棄的感覚が Pt の全てに浸透し  
ている

Pt : 結婚の失敗、わが子の喪失の話を反復して、必要な反応を Th から引き出している

Th の涙：共感の始まり（Pt の中の隠れた自我状態による誘発）

Pt：「私は共感の対象になりうるのだ」

Th：（Pt への関心、思い、Pt の状況への探索が増す）「私は Pt の味方になっている」

リラックスとからかい：「私に支配されている、へえ、本当に？」

「私がここにいるのと、いなくなるのとどっちが、より悪いことでしょうか？」

Pt：「Th がいなくなるほうが酷いですよ」

Th：Pt の依存欲求（甘え）を認めることの重要性に気づく（Th と Pt の沈黙↑）

Cf：ユングの「心理的妊娠」（死と再生）

- ・これが Pt の C に命を与えた瞬間というものか？
- ・Th の涙 → Th の傷つきやすさの表示 → Pt の中にも「私は傷つきやすい存在だ」（最初の感覚）を引き出している（Pt の内的退行）
- ・Th の涙以降：セラピーは Th・Pt 間に C 同士の出会いの機会がより富んだものになる

## セクション 2：絶望 / パワー / 「汚い愛」 (P. 124)

### セラピーの経過：一貫した支持療法による A の発達の促進

Pt：別の交際を始める。以前と同じ満足の行かないスタイル

Th：（初回面接の嫌悪感を自分の中にしまっておいてよかった）

Pt：（性的感情、女性との難しさについて詳しく語る）「女性に性的魅力を感じない」

Th：（欲望と愛情の間に分裂があるようだ）「女性への虐待願望があるのでは？」

Pt：「そうだと思う。でもそれを変えることには絶望的なのです」 → ポルノを使う癖について話す（絶望の象徴） → 自己嫌悪

Th：「この意味を理解するのは重要ですから、一緒に探っていきましょう」

「ポルノの使用は依然として女性を傷つける方法では？」

Pt：「私は自分の感情や人間として当然の傷つきやすさのために物事を“めちゃくちゃ”にしたくないのです」（自己嫌悪と自制心希求の間の葛藤）

（これらについての話し合いを重ねる）

Th：（Pt から微妙に攻撃されている感じ）：「女性を虐待したい」というメッセージの隠された部分では？

Pt：（連想と投影）

①政治上に方正さへの過剰反応、②男性であるという理由で迫害を経験している

「同僚のフェミニストたちにとっても腹が立つ。私は公にはフェミニズムを支持しているのですが、いつも彼らに怒っているのです。彼らの犠牲になっているみたいで！」（怒りの表出）

Th：「あなたは自分の怒りを表現してもいいのです。あなたが本当に怒りを感じているときは、はっきりそう言うようにして下さい」

(Pt は受動攻撃行動のために攻撃を受けやすい弱点をもつにいたっている)

Th : 一貫して支持的な P<sub>0</sub> になることで Pt の A の発達をうながす

Pt : 「女性の何人かは好きです。付き合えるかもしれません」(A の発達↑)

### 基底となる抑うつ感が続く

Th : Pt の抑うつ感 (攻撃性と頑固さ) は依然続いている。どうすればいいのだろうか？

: 治療過程のどんな喜びも否定され、Pt の絶望的、自棄的感觉で消し去られてしまう

: 支配権を奪われ、敗北感に圧倒され、激しく攻撃されている感じだ (絶望感)

Pt : 「何も変わっていない、絶望的、自棄的で惨めだ」(単調なトーン)

Th : 激しく攻撃された感じだ。「これを Pt と分かち合おう」(決心)

「あなたがお話になったあの敗北感を今、感じているのに気づいています。しかしそれはセラピストとしての私の敗北です」

Pt : 「そうです。あなたは私がいつもどう感じているか分っている。その通り。私は同じタイプの感情を感じています」(絶望と安堵感、Th に深く理解されたと感じた印象)

Th : (Pt の感情が私の心にすっきり「入り込んで」、影響しているといった感じだ)

Pt : 「絶望感は消えませんが、すこし安堵した気持です」

Th : (二人は痛みを伴いながら近くにいるような感覚をもった)

Th と Pt : 「私は OK でない、あなたも OK でない」の相互認識の意識の中で見つめ合う

Pt : 「私はあなたに勝利した感じに気づいています」(しっかりした口調)

Th : 「これは変化になりうるのだろうか？」「私は確かに、Pt の感情の水路として行動しているようだ」(つかの間の希望)

(別れを告げるとき)

Th : (ある種の悲しみ。互いに身体的な接触を持ったような感じ)

Pt : (面接室を去るに当たって人目を気にする態度を示す)

Th : (連想)「これは売春婦が抱く感じかもしれない」

### 考察

Th : (私は Pt のコンテイナーだ=投影同一視のプロセス)

- ・ 投影同一視 : Pt の無意識の衝動が、Th に変化すべきとプレッシャーを感じるように仕向ける (Ogden)
- ・ 私は「性的に虐待される」と感じるように意図されていたのだ。今は本当にそう感じ始めている
- ・ Th の絶望の言語化 → Pt 「深く理解された」 → A の気づき ↑ → やりとりの分析へ

### 父子の交流パターンの分析

Th : (内在化されている父親との関係の探索 — 弾圧的で弱いものいじめをする父)

Pt : 父は弾圧的で弱いものいじめをする人。また脆弱性を嫌い、妻子の中の女性性の価値を値引く人で、Pt の感情や女性的特性 (アニマ) を「弱虫」として拒んだ。

「父は生涯、私をめちゃくちゃにしてきたのです」

Th : (新たな認識 : Pt の「Th に対する勝利の確認」は、父親の妻子に対する弱いものいじめの反映だったのだ )

- ・ Pt の自分の傷つき易さの否認は、男性性に対するネガティブ概念と結びついている
- ・ 男性性 = 反女性性の立場によって定義されている

Th : (もう一つの認識 : Pt に「私を犯す」ことを許したのは重要な意味を持つ = Th と Pt はあたかもセックスし、私が性的対象になったかのようだ。)

- ・ この解釈の由来 : Th の売春婦との同一化 (実際にはこの点は解釈せず)
- ・ 重要な治療進展への転機 : 欲望と愛情の統合への道を拓く

### セクション 3 : 恋に落ちる (P. 128)

Th : Pt と情緒的に結びついていると感じ始める→

- ・ 白昼夢 : 恋に落ちたよう → 想像が進むままに任せる (例. 「偶然に」 出会う方法、湖への散歩、野外コンサートへ共に行く、などの想像)
  - ・ 心理的安全性の確保 — 夢をファンタジーに委ねる。自分の夫婦としての現実の関係は満足。私は安全。
  - ・ この現状の意味をどう理解しようか、自分の感情をどう活用しようか? 困ったな
  - ・ 自分の反応を重要と考えたくない。この気持を否認したい。(しかしそれはよくない)
- 鮮明な夢 : セックスの相手のである Pt が突然一歳半の赤子に変わる ( 警告の夢?)
- ・ 意味 : 夢によるスーパービジョン (超越したビジョン)  
— 「あなた自身の感情をコンテインしてください」「僕はたった 1 歳半なのです。だから僕の成長を助ける仕事を引き続きやってください」

### 考察

テーマ : 母性愛剥奪 (その影響 : 十分証明済み)

- ・ 母子関係の見直し : セクシャリティとその表現の影響が強く影響している

Mann, Lichenstein : 「母子の間に起こっている原始的な感覚の交換の中に、成人の性の前駆を見ることができる」

Th の夢がもたらしたもの :

- ・ Pt の退行した状態を示し、私は自分の混乱した感情に今まで以上に耐えられると感じた
- ・ 「転移は真実でない」という見方を打ち消し、ファンタジーの桎梏から私を解放した
- ・ ファンタジーの意味について確信を深めた
- ・ 自分の感情の結果を恐れず、その真実性を自分のものにすることができた

- ・感情は夢の世界に閉じ込められていて、セラピーに使えない状態にあった
- ・自分の感情の意味に確信を持ち、束縛から解放される

### 治療関係の変化

Th：両者の間の近しさ、性的感情、温かさ、情緒的親しさについてコメントを始める

Pt：温かく、はにかんだ微笑を伴う非言語的反応で応じる

セラピーの効果

- ・見せかけの客観的姿勢を用いなくなる（不正直で無力になるかもしれない）
- ・自分の感情を認める非侵入的な方法を見つけた

### セッション4：糞で診療室をよごす（P.130）

Pt：「犬の糞の上を歩いてしまったのですが、書斎の中の臭いを気にしないでくれたらいいな」（相談室ではPtは靴をはかないルールにしてある）

Th：（驚愕）（激怒に飲み込まれた感じ）何を意味するのか？…（混乱、無能、恥ずかしさ）

- ・感情反応 ①危険：このセッションでは何も言うべきではない  
②恐怖：投影された怒りを行動化するのではないか？ →Ptに恥をかかす？
- ・感情を和らげるコメントで何とか切り抜ける
- ・事実にしがみつくと：Ptは自分の行動を本当に分かっているようだ（無意識なのだ）

後始末：カーペットの掃除

Th：「おむつ交換」をイメージする（母親の拒絶、恥ずかしさと憎悪。乳児の憎悪と激怒を想像する）

- ・Ptの攻撃性を怖いと思い始める（身体的に私を圧倒するのは簡単だ）  
：逆転移を調べる— Ptは自分自身の攻撃性を恐れ、それを十分に意識していないのだ  
Ptの怒りと激怒の存在に触れても大丈夫なのだ

### 次のセッション：怒りへの対応

Th：「あなたのある部分が私に対して深い怒りを感じているようです」

Pt：「そんなこと言われると困惑するなあ……でも治療費と時間のことで先生に腹が立つことが大分あります」→「私は先生にどれほど支配されていることか……」

→「私は心の底では先生に依存しているのを恐れているのです」（基底感情の表出）

Th：（現れた情緒を余すことなく探索する）

Pt：（女性に対する分裂した態度を統合し始め、情緒の幅を広げる）

### 考察

Pt：（脆弱性がまし、治療関係に頼るようになる → 核となる諸体験へ結びついていく）

・核となる経験とは：

- 1)  $C_0$  中にあるもの：Th の愛情を Pt の攻撃感情が破壊しなかった
- 2)  $P_1$  に追いやられたもの：女性に対する敵意について意識できるようになった

Th：(私の愛情の程度は原始的な投影であった。Pt の攻撃感情は欲求にまつわる感情と直接結びついていた)

・(治療関係に対する Pt のサディスティックな攻撃を双方で共に乗り切れた)

## 全体的考察

終期：

Pt：母親のうつ状態について話す

：「母は戦時中に婚約者を失い、その痛手から立ち上がることができず、その反動から父と結婚したのです」

Th：(母親がうつ状態にあり、愛のない結婚ゆえにわが子と恋に落ちることができず、恐らく恋する気にもならなかったのであろう)

Th：性愛的転移の生育歴的視点からの考察

- ・何が原因でよき母子関係ができなかったのか？
- ・Pt は転移を通して Th を恋に陥れ、自己愛的憧れや切望のいくらかを満たした
  - 1) 特別でありたい
  - 2) 自分に誰かが情熱的であってほしい
  - 3) 情緒的で愛情深い近しさを経験したい

Gabbard：Th は転移によってインパクトを受けることをいとわないことが必要不可欠

Erskine：これは関係性のニーズの一つとして理解できる

Sternら：乳児は周りの環境に影響やインパクトを与えようとしている(実証)

乳児は生れ落ちた瞬間から、愛し愛されることを望み、それができる存在である

著者の意見

- ・Th 自身がいくらか性愛的感情を持っていることを認めることが重要(=母性愛?)
- ・セラピーの治癒の重要な部分：Pt が、Th の中のやさしい性愛的感情を引き出すことができることと理解すること

Th：「私は治療関係の中に時に性愛的な感情があると気づいています。なぜなら私はそう感じてきたからです」

- ・愛と並んで性的関係が存在している → Pt：「自分には性的魅力があり、同時に温かい関わりを得ていることをと意識するようになりました」(困惑と喜び)

## 投影同一視について

Mann、Joseph

- ・ Pt は Th を「肘で軽くつつき」、自分の投影と一致するよう Th を動かそうと仕向ける  
「Pt が Th にプレッシャーをかけることで、違った行動をとらせようとする Pt のやり方」

Ogden

- ・ Th は快く自分の想像力を使い、Pt の関係性の中に入っていくこと（必要不可欠）
- ・ Th は多少のアンビバレンスを持ちながらも、自分の C を使って Pt の C を理解すること
- ・ 転移を本物の関係の部分として理解し、ファンタジーの中に置き去りにしないこと

Kramer

「母親と赤ちゃんの間の愛はセックス以外のあらゆるものが含まれる。しかし徹底的にはやらないで、少しやり残しなさい。それが真実だから。ただその勇気があればだけど」

## なぜ著者は性愛をファンタジーの下に消してしまいたかったか？

性愛が幼児に結びつくことに対して時に社会が抱く不安心配を反映しているから

## 結語

- ・ 本ケース：性愛的なものの発生が最初の契約とつながっていた
- ・ Pt は強い性欲、願望、セックスを、愛着と同じ枠組みの中に持ち込む方法を見つけねばならなかった
- ・ この種の変化を意志の力で成し遂げることはできない。理由：情緒に関するものである
- ・ 性愛的なものは、ある関係の中で自由に発展するときは常に、精神的な回復や精神の健康をもたらさうる
- ・ 愛は夢の如く物事を歪めもするが、それ以上に明らかにするものかもしれない
- ・ Pt に Th 自身を使うことを許すとき、Pt の中には、相手と関係を持っているという感情がより全体性を持った十分な形で現れる → アタッチメントを再生し始める

## 第6章：性愛的転移より

### 性愛領域で不快感を感じる理由

- ・ 性が全ての精神障害の基盤である(精神分析の諸理論)
- ・ 近親相姦のタブー：無意識的レベルで性的願望やファンタジーの存在の否認との区別  
(一)

## 性愛の願望について

- ・母子の質的な関係に「性的行為を除く全てのもの」が含まれている
- ・バーンの性的ゲーム：性愛的状況に多くの要素が含まれる……誘惑、罪悪感、敵意、興奮、快樂など

## 性愛転移

- ・性愛的転移を想像的に探索することはCの解除にとりわけ望ましい
- ・Thが自分の防衛を隠すために社会統制（目的）と契約をつかう
- ・Thが最大の弱点と感ずるのは特に性の領域である
- ・「性愛的な」という用語には身体的な欲望だけではなく、愛が含まれている
- ・関係性の中で性愛的なものになってくるものは何でも協働で作られ出されるもの
- ・自分のThに自分に関心を持つように仕向けられる事実は治療においては重要である

## 扱い方

- ・探索：ThとPtはイムパスを超えてPtの表現されない世界の層に移ることが可能になる
- ・性愛的なものは、全体性を求める普遍的な格闘という原型を含んでいる
- ・愛は関係性ばかりでなく、もっと魂の出来事としてみなすことが有益である
- ・Ptが共生関係から分離独立する力は、Thが父母両方との同一化を体験できる能力にある程度かかっている
- ・性愛的な逆転移に内在している破棄的要素：セラピーだけでなくThをもダメにしようとするPtの試み
- ・Ptの複雑な情緒の理解：Ptの内面……アタッチメントの対する絶望的なニード、アタッチメントを得るために性を利用する、愛や温かさを破壊して台無しにすること、Cの誇大さと尊大さ

治療：心の中の無意識と意識（CとA）の間につながりをつける

## ブリーフ・セラピーとしての TA (ジョアンナのケース)

症例：女性、30歳、専門職 (P. 248)

主訴：人生の危機に遭遇している、短期療法を希望、低い自己評価に対処したい、  
「頭の中の不可解な“スパゲッティ”に意味づけして前進したい」

契約：12週間共にワークする

### 初回面接

Pt：人生の物語を緊張感にかられるように吐き出す（これまで受けた批判、両親との困難、周囲から受けた裁定）

Th：Pt はきわめて高い期待を持つ人だ（一貫して傾聴、内容の理解の伝達に徹する）  
（目的：治療同盟の確立）

### 治療契約

- 1) 自信をもつようになる
  - 2) Th・Pt がどのようにセラピーを活用できるか探求する
- Tt：Pt には現実的な緊張感がある（状況提供の態度、会話の内容）  
自由に走り回ることを許そう

### 面接 2

Pt：人生の物語を続ける（急いで多く語ろうとする）

Th：「もう少しスピードを落として。ワークの時間はある。望む変化には時間がかかるものなのです」。 (Pt は人生に高い期待を寄せている)  
：「セラピーは前もって期待の持てない場、それを正しくやる方法はないのです」

### スーパーバイザー（著者）のコメント

Th について

- ・関係作りに共感的相補交流を使っている（バーンによる批判）
- ・Pt の雰囲気から「急げのドライバー」に気づき、隠れた課題（物事をテキパキしなければならない）を取り上げ、Pt の高い期待も察知している
- ・解釈を避けている（Pt は容赦のない批判を経験している。この段階では Pt は解釈を交差交流、批判と感ずる可能性がある）
- ・共感的対決を用いている（期待と状況利用の可能性の間の齟齬の明確化）
  - ①相補交流の中で、交流を維持するために対決を用いる。非批判的な雰囲気を提供
  - ②脚本にとって強力な対決：交流の裏の鋭い把握（Th が権威を手に入れている：注意！）

- ・ドライバーへの対応

Th:「あなたは自分のために時間をとってもよい。Thの期待に応えなくてもいいのです」

## スーパービジョン

### 1) Thの不適格感について

Th:「私のセラピーはよくない。Ptのためにもっと何かをすべきだと思います」

SV:「あなたの今の感情は“急げのドライバー”の行動の下に隠されたPtの内的世界を解く鍵となる可能性があるのです」

「あなたの不適格感は、①Ptの奥の不安、②Ptは「適応した自己A<sub>1+</sub>」のように行動すべきだというあなたの期待の現われでしょう」

### 2) Thの治療方針(A中心)について

① 解釈と説明によってゴールを達成するというアプローチ

② A<sub>1+</sub>に給油する(Thの「適応している演技」の部分をも充たす)

SV:この方法でスタートするのは容易ですが、結果重視の「駆り立てられたセラピー」は問題をさらに難しくします(注意!)

### 3) Thの不安の源について

Th:「Ptは、私が全ての答えをPtから隠していると考えているのではないのでしょうか？」

「私は王座に座らされたのではと心配です」(この主観的反応は抑えられています)

「Ptは偶像化した投影転移(P<sub>1+</sub>)に逃げ込んでいるのではないのでしょうか？」

SV:「さあ、これはむしろ“取り入れ転移”のように見えますが、どうでしょう？」

Ptは理想化転移の初めの段階で、原始的理想化とミラーリングの絆を壊されると、それを再構築しようと努力するものです(=幼時に壊された絆)

Th:(SVに転移の重荷をサポートされた。それによってPtから“素晴らしい”とみなされたときに感じる恥の感覚を避けることができた)

SV:「Thが治療の早期にPtによって与えられている想像生活上の特質(=転移)を否定すると、Ptは自分のニーズを安全な立場で扱う試みを阻止されたと感じるでしょう」

### 4) 治療上の問題の一つ:自己評価

- ・Ptがもたらす理想化転移について:

目的:Ptは確固とした自己感(A<sub>0</sub>)を発達させるためのサポートを必要としている

- ・乳幼児研究:「調律したミラーリング、情的理解(スターン)、情緒的絆(ボールビー)などは自己評価と自信の発達に欠かせない」

- ・この時点での治療者の能力:全知全能の他者をThの上に投影することを喜んで許す

=Th が共感的に調律した存在を「全て知っている」存在に統合したことになる。

- ・ Th は Pt に時間をとり、誇大な期待を制限するように招く
- ・ Pt は防衛的にならず、それに安心して反応することができる（最初の段階からコンテンツされた、抱えられていると感じる）
- ・ ウニコット：ホールディングする治療環境は有意義な道具
- ・ ボラス：=自分を「変容対象」として提供する

転移：Pt が Th を「自己対象」として利用できるようになること

#### ・ 変容対象とは

意味：幼児によって自己経験の変化のプロセスとともに経験的に同定された対象

ケース経過 1 のまとめ：理想化転移の枠組みの中でのワーク

- ・ スピードを落とし、2 者のために時間をとろうと招いたことは、偽りの自己機能 ( $A_{1+}$ ) と本当の自己経験の間に道をつけたとした

### ケース経過 2 (P. 251)

Th：相補交流を続けて治療同盟の促進を図る

Pt：生育歴を披露する（母は統合失調症、生後 6 ヶ月間、母親から分離されたなど）

「自己分析をしても、その理解が今の自分が変化するのにあまり役に立たないと思います。肥満は自分を防衛する手段だということは分っています」

Th：TA モデルの紹介。（人格適応理論の応用 — 思考のドアでの出会いの試み）

Pt：「TA は面白そう。私も TA 短期講座をとっていました」

Th：「次回から TA による理解に戻りましょう」

その後の経過

Pt：「自己批判をどう変えるか、行き詰まりました」

Th：Th もここで行き詰った感じ

### スーパービジョン

Th：「Pt の自己批判はどこからくるのでしょうか？ 幼児期に父親から与えられたものの拡張版とは分かるのですが……」

### スーパーバイザーのコメント

SV：「抑うつ的な母親との経験は、多分 Pt の自己評価と自信の低さに大きな意味をもつのではないのでしょうか？ 理想化転移が発達したのはその証拠でしょう」

「しかし、治療の早期段階でこの種の説明や解釈は効果的だろうか」（自問）

Th：「私は違うと思います」

SV：「Th と Pt が行き詰まりの感情にかられていますね。それは2人が状況を変えたいが、どう始めたらよいか分からないことによるかも知れませんね」

SV：自己モデルの提示。

- ・ Pt は C の混乱を訴えているのであって、逆転移の中で、Th に同じ C の混乱を感じさせるという形でそれを伝えているのです (Fraiberg, 1987 の研究、参照)

仮説：Pt は幼児時代に温かみのある調律的で間主観的な接触をほとんど持ったことがなかった。この接触こそ Pt が理想化のプロセスで直感的に求めたものである

SV：初回「頭の中のスパゲッティの感覚」の意味は自分では認めていない経験と感情のこと（共感的に調律してくれる他者なしに、この意味を知ることはできない）

Th：初期の不安感が減り、TA モデルに沿ってアンカリングになるコンタクトを続ける

### ケース経過 3 (P. 253)

休暇前のセッション

Pt：「私は OK な感じが増しました。週単位の治療はユックリな時間と人生を内省する機会を与えてくれています。おかげで私は自分にも優しくなりました。」

「Th と私の関係を常に“私は OK, あなたは OK”と感じています。これは2人之間にある相互の尊敬の念のためです」

Th：「ご両親の訪問に当たって、お父さんからの批判への対応策を考えておきましょう」

### スーパーバイザーの考察

- ・ Pt は 2 つのレベルの関係性がセラピーの中で役立ったと思っている

#### 1) A レベル

- ・ ミラーリング、尊敬と相互性に向かう A の関係性ニーズが満たされた

#### 2) C レベル

- ・ PT の理想化は理解が C の自我状態で起きていることの象徴
- ・ 乳児のミラーリング、完全性と理想化に対する切望を示す
- ・ 自分が順調にやっていることを Th に知ってほしいことの示唆

SV：共感的転移関係の深まりは、Pt が安全と感ずるのを促す

- ・ かって手に入らないと感じていた自分の「自己」、本物に近づいた自己経験につながる

### ケース経過 4 (P. 254)

Pt：休暇後、滅入った状態。父親の非難と無視に対する怒りと傷つき。絶望の表現。

Pt：「私は自殺をするかもしれません。屈辱を感じています」

Th : 「そうした気持を一緒に考えましょう」

Pt : 「こうした気持や考えを実行に移すことは絶対にありません」

Th : (セッション中、言葉を持たない)

(慰めることが不可能な子どもと一緒に部屋にいるような気分)

(抱きかかえて話を聞き入ることしかできないという気分)

## スーパービジョン

Th : 「Pt の自殺のほのめかしに対して、私は十分なことをしたのか、正しい介入をしたのかどうかと考えると怖いのです」

SV : 「あなたは自殺しようとした人を救ったファンタジーを持ったことがありますか？」

Th の気づき

- ① 治療で十分なことをやっていないという恐怖は、自殺と個人的喪失体験に関する責任感(=未完のC)に関連がありそうだ
- ② 自分のセラピーの中で、まだしなければならないワークがある
- ③ セラピストとしての自分の成長が必要である
- ④ 逆転移から今後の課題へとシフトする必要性が浮かぶ

Pt : 「あなたは私を抱きしめ、私の話すことを本当に分かってくれているようです」

「あなたが私の自殺したい気持を真面目に受け止めてくれているので、こう言えるのです」

SV : 「Pt は今回、いつもより絶望的に感じているかも知れません。なぜなら偏見を持たずに話をきちんと聴いてもらえたのは初めてだからです。だから Pt は自分の気持を本当に感じ経験することを、自分に許可することができたのです。あなたも彼女にこう説明してあげることができるでしょう」

SV : 「これに加えて、これ(自殺願望)は彼女の一部に過ぎず、全てではないと気づかせることもできるでしょう」

- ・ Th は次回のセッションで上記の説明をし、Pt も自分のCについて理解する
- ・ Pt の絶望感は2週間後に消滅 → 「私の“理性的自己”が“取締役”に復帰しました」

Th : Pt の汚染解除のワークを行う

- ①自分の感情がどこから来たのか、②子ども時代に抱いたのと似た諸感情をめぐる閃きの探索

## スーパーバイザーの考察

- ・ Pt は自分の不安を Th に伝えている

Th の逆転移の探索

- ・ 一部は Th のバックグラウンドに由来する

### Th のホールディングの能力

- ・自分の不安を自分の中にコンテインしてきたことは治療的に有意義であった
- ・コンテインした不安を動員できると、他の感情をコントロールすることができる
- ・ホールディングの能力によって Th は Pt の絶望、不安、抑うつ等を聴くことができた
- ・Th の能力のおかげで、Pt は自分の中で分裂させていた C<sub>0</sub> の中にあった自己の「私」とつながることができた

### 仮説

- ・専制的な父親の下、抑うつ的な母親を持った場合、Pt は人間関係から自分の一部を引き下がらせてしまう (Fairbairn)

### 治療

- ・逆転移の不安・パニックを行動化せず、感情をコントロールして Pt のこの部分との関係を維持すること

### 治療的にマイナスになる可能性

- ① 安全のための契約、抑うつ剤の提供は疑問
  - ・他者に迷惑をかけすぎる感情を再体験する可能性が大きい
  - ・Pt が再び人間関係から遠ざかる可能性
- ② ①は初期のプロトコルの再演＝母がコンテインしなかった
  - ・乳幼児期の圧倒的な抗しがたい環境の再現を創造しては？

### まとめ

- ・Th は直感的理解によって、Pt の太古的 C に注目している (低い自己評価、弱々しさ)
- ・関係の中で Pt の自己感の発生と理想化の発達を可能にするスペースを設けている
- ・それによって Pt はアタッチメントの安全性を経験することが可能になる
- ・Th はこのスペースの提供により、Pt が Th の A とのつながりを維持できるよう共感的説明を行うことができた
- ・結果：Pt の A が固定化され、C の経験に圧倒されなくなった

Th のホールディングとアンカリングの能力により、最初の 12 週の契約を超え、半年の治療を完遂することができた

### ケース経過 5 (P. 256～257)

Th : Pt は傷みの深いレベル (地底点) に達した → ホールディングを維持する

- ① 感情表出を促す、② 「そこにいるだけでも OK ですよ」と伝える

Pt : 「前より早く脱出できました。反対側から脱出するために、これらの場所をもう一度尋ねる必要あったのです」

「私はプロセスを信用することを学びながら、人生の悪い時期を経験することを自分に許せるようになりました」

「自分の中にもっと居心地のよい空間を持つようになると思います」

### スーパーバイザーのコメント

- ・ 転移関係が深まるにつれて、Pt は対応不可能に見えた苦痛な経験や感情を安心して表現できるようになった
- ・ この治療のペース
  - ① 感情のコントロールをする A の能力を保つ
  - ② 太古的な場所を出たり入ったりできる
  - ③ 結果指向的セラピーではない

### 終末期：振り返り (P. 257)

Pt : 「新しい、平和で自信のある自分をエンジョイしています」

「前より自分が好きになり、スピードを落とし実現不能な 100%の期待を低くしました」

治療の成功の理由

Th : 相互に明確な敬意があったこと

Pt : 「あなたは私を一度も裁定したり、批判したりしたことはなく、何事に対しても推定しませんでした。これは私が一度も経験したことのなかったことです」

Th : 「あなたは、自分のパワーを私から取り戻したのです」

Pt : 「私は、自分の答えを自分が持っていること、自分が人生の中で、とくに他人に対する反応についての多くの選択や自律性を持っていることに気づいたのです」

### スーパーバイザーのコメント

- ・ Pt は Th のコンテインの側面を取り入れた
- ・ Pt は Th を変容対象として用いることで自己体験を変化させた
- ・ 理想化はまだ続いているが、よいことだと思う。理由 : Pt は自分の心の中で、今の状況から「良い対象」を減じていくことができるから。
- ・ Th は今、Pt の自己のフェルト・センスの中に取り込まれているようにみえる
- ・ Pt の OKness は、Th が Pt をコンテインし、ホールディングしたことから育まれたものである
- ・ Th に取り入れ転移の理解がなければ、Pt は幼時の母親の喪失を繰り返す危険性があったであろう
- ・ Pt は Th を理想化された「自己対象」とみなすことによって、自己の中に自信と安心感の感覚を進展させたものと思われる

## 続編・ベアトリスの症例(2)

### 新しい診断 (P. 21~22)

Th : Pt を他の誰かに変化させる必要はない

Pt : Th の汚染解除、直観 → 「これまでと違う真理へ向かえ」

Th : 確たる理論的構造がない不安

Th : 共感的共振の中にいた → 治療の方向性の吟味

### 自我の障害

1. 「自己」対「自己」のタイプ3のイムパスに閉じ込められている
2. 犠牲者の立場に閉じ込められている
3. Aはよく機能しているが内的にはほとんどの時間、退行していて成長が望めない
4. 変化の可能性を値引きしている
5. 「はい、でも」のゲーム
6. セラピストと Th を非難している
7. NP を内面化して保持することができない

### 治療経過

#### 治療計画の変更 (P. 272~273)

- ・ 前回の治療の目的 : Pt の不安をコンテインし、「犠牲者」に調律する
- ・ 経過 : 注意深い探索 → イムパスの同定 → 再決断療法
- ・ 結果 : Pt は本物の自己感を持たない → 誤った自己機能に基づいて進む
- ・ 変更 : 自己感の欠如を扱う。自他否定の構えへの挑戦。深い探求に入る
- ・ 方法 : セラピストの変化 → ワークの質の劇的な変化。Pt への調律、共感的探索  
→ 感情と経験の結合 → 非言語的やりとり ↑ → 沈黙、呼吸、音 → 直観感覚への集中が増す
- ・ 気づき : Pt の脆さ、表層下の空虚感と恐怖の理解
- ・ 転移関係の深まり → Th の表現の抑制 → 喪失感、不適応感、混乱 (Pt の C の反映?)  
→ 強制的呼吸

Th : これを用いて自己感を表すイメージを見つけ出せるかどうか?

#### 1. 独房 (P. 273~274)

Pt : 独房の中に坐っている。ドアに鍵。出たいかどうか分からない。

Th : 独房から連れ出す試み (比喩的に)。以前の方法でのぞむ。

Pt : 提案に消極的。

Th : 抑うつ的自己感に留まるほどに変化したのだ。

積極的退行の回顧 : 治療グループが自己感に寄り添うことを回避してしまった。

強い退行 → 脚本の強化、Pt の孤独 ↑

治療グループの躁的防衛の共謀 → 脚本の感情プロセスの行動化 ↑ (?)

Th : 共感的探索、明確化、フェルトセンスを Pt に調律 → 孤独、孤立、空虚感の理解。

Pt : そのイメージで Th とコミュニケートはじめる。

Th : Pt に近づく方法を見つける必要がある (一緒に独房に入る)。

## 2. 変容転移 (P. 274) = 投影同一視

Th : 関係性の局面を迎える……Pt の心理への感受性 ↑ Th への侵入、Th イメージの自由な変形を許す (Pt を変えようという期待を手放す)。

Th : 独房のイメージのワーク → イマジネーションの拡大。Pt は独房から出るまでに何かが起こる必要がある → 共にいることの抵抗 ↓ → 独房の内側に対する関心 ↑ (なぜ、誰が、どんな罪で? etc.)

Th : 独房の中の絶望感と空虚感 ↑ → 感情から逃げたい vs 留まる必要 → 比喩から比喩へ (自由連想の動きに似る)。

## 3. 人形の家 (P. 275) (屋根裏に閉じこもってプリンスのイメージを楽しむ)

Pt : 自分の重要性 ↑ ビジネスセンス : 家を買う 家 = Pt の投影

Th : アンビバレント : 自活 OK vs 重労働。彼との出会いの機会を失うのでは?

動揺と内省 : 自分の活動は全て自己中心的 (独りよがりの解釈では?)

Th : Pt の家に対する強迫行動の探索 → 「過去の何かを再現しようとしているのでは?」

Pt : 屋根裏部屋での遊びの思い出。「象牙の塔」に隠れる。外出の必要なし。「私はプリンス」。

Th : 解釈 → 過去からの経験の中での行き詰まり → 在外化のニードからの自由  
あなたの満足と善の源 = 自分に頼ること。一人で満足感を探す → 孤独感のみ  
= スキゾイドの適応パターン → 外界を信用し、自己統御と独立の幻想の断念が必要

## 4. 内的退行 (P. 276)

Pt : 祝福の対象の家 → 独房の象徴。

Th : 2 者の関係の発達的理解

- ・ Pt は今、内的に退行している。過去の退行のワークは表面的だった。
- ・ Pt は退行を通して内界を外在化、しかし A によるつながりを維持できずにいた
- ・ 不統合の状態 → 今回は Th との関係の中で退行が維持されている
- ・ Pt は両者の関係の中で、明確な母・乳児の 2 者関係の再演をしなくなる

Pt : 二人の関係の中で熟考・黙想し、自然につながる時間と空間を手に入れる

Aを作り上げ、乳児性を損なうことなく発達的なCの退行をもたらす

Th : Pt の家に対する強迫行動の探索 → 「過去の何かを再現しようとしているのでは？」

Pt : 屋根裏部屋での遊びの思い出。「象牙の塔」に隠れる。外出の必要なし。「私はプリンス」。

Th : 解釈 → 過去からの経験の中での行き詰まり → 在外化のニードからの自由  
あなたの満足と善の源＝自分に頼ること。一人で満足感を探す → 孤独感のみ  
＝スキゾイドの適応パターン → 外界を信用し、自己統御と独立の幻想の断念が必要

## 5. 几帳面な境界線 (P. 276)

Th : スーパービジョンに慎重。スーパービジョンは2者関係への“侵犯者”？

治療関係：沈黙↑

Th 自身の逆転移の調律 → 2者間に非言語的世界が現れ、言語が自ら現れる  
新しい家についての探求 → 豊富な象徴イメージ 薄い壁（プライバシーの侵害）

Pt : 侵入に対する耐え難い感覚。

Th : (衝撃) 主題を変えたい

共感 → 守られていない、見られている、攻撃されている感じに理解（痛みを味わう）

脱線 → 社会的モード（行動療法的） 例. 外からの音を弱める方法を教える

気づき → “Pt の侵入感につき合いきれない”

## 6. セラピーの過ち——セラピーの利益 (P. 277)

Th の失敗、誤調律には機能回復に時間がかかる

Pt : 投影転移の関係 → Th を「よい存在」と見る → 喪失恐怖（ありのままゆっくり話す）

Th : イライラ

Pt : 独房への閉じこもり、Th への攻撃、見下し、「分かっているのか?」、不機嫌な沈黙、  
合理的論調、めそめそ泣き、価値の引き下げ

Th : 拷問にかけられた感じ、追い出したい衝動

憶測 → Pt の母が持ったと同じでは?（楽しみたいときに、子どもに後追いされる）

内省と気づき：閉じ込められて鍵をかけられた感じ → 空虚、無力、不毛の雰囲気

黙考（連想）：なぜ男性が去っていくか（セクシャルな、よい雰囲気欠如）

Th : 空虚感についてのコメント

Pt : 怒り → 投影転移 → オープンな怒りと敵意

Th : 肯定的反応、「騒ぎ立て」 → “自己感が動き出した”

## 7. デメテルとペルセポネ (P. 278)

Th : もろい自己感と深い無価値感の掘り下げ

Pt : 激怒の下に潜む抑うつ感につながっていく（失望感、孤立感、無価値感、絶望感）

抑うつ感の恥を隠す

Th はこれを扱えないだろう。抑うつ感をもつことは悪いこと（母は許さない）

Th : 抑うつ感の指摘、抑うつ表現のストローク → 解釈（神話の比喻）

Pt : 解釈 → 抑うつ脱出（一）。抑うつを感じることに希望と許可を得る（逆説的）

Th : Pt の抑うつ感の価値の発見（承認）

Pt : 自己の価値を感じ始める

## 8. 愛されている感じ (P. 279)

Pt : 深く熟考

Th : 親密な感覚 ↑ Pt 冥界から抜け出す希望と確証

Pt : Th の希望の高まりに伴って、内省が深まる

Th : 「あなたは通過儀礼を経験している」

Pt : 抑うつ感は病的ではない、それは自身の一部、自信は価値ある人間だ

「私はあなたに愛されている感じですよ」（最大の出会いのモーメントの一つ）

Th : Pt は私を安心させる、愛情に満ちた対象として取り込み始めている（愛情）

## 考察

Th : Pt に愛情を感じた。Pt の抑うつを支え、可能な限りの創造力を活性化した。

作業の中で自分を支えた。Pt による抑うつ感の連続的な言語化の確認。

空虚さ、空間、虚しさは自分たちの中に行き場を意味付け、再帰しなかった。

## 9. 大聖堂 (P. 280)

Pt : 教会や大聖堂の夢。（美的感覚、空間感覚、豊かな感覚）

Th : スピリチュアルに感動

Th と Pt : イメージと夢の意味の探索。喜びと官能の感覚につながる。2 人の間に楽観、妥協、繋がり感覚の存在。

Th : Pt は実在感、健康な自己中心化をコンテインしている

夢の探索 : セクシャリティの感覚 → セックスの夢 → 熟考、楽しみ、さながら祝宴

## 10. 行かせる (P. 280)

Th : 自分の人生のいくつかの 1 局面についての自己開示

Pt : べき主義や情報に圧倒されない強い自己感

Th と Pt : 終結の前に反芻の機会（2 ヶ月）を持つ。サイコセラピーの限界を考える。

Pt : 限界にかかわらず、自分の自己を持っていることをしっかり自覚している

Th と Pt : 外の風邪が葉を舞い落としていることに同時に気づく。黙想の分かち合い

終結 : その可否、仕方、時期などは、治療関係の進展の一部。共に探索する。

## 結語 (P. 282)

### Cの汚染解除

- ・無意識のレベルでワークする必要性を理解するTAセラピストは増えている
- ・合理的な気づきでアクセス可能な自我状態に加え、非言語的で無意識な自我状態も扱う必要がある
- ・Pt：理解のツールとしてThの「自己」を用いることが求められる
- ・言葉の感覚の境界（体、情動、心理）に対して注意を向けることは最重要事項
- ・傷つきやすく病的な自己でも活性化できる安全を提供すること（Thの責任増大）
- ・Cの汚染解除は厳しく勇気のいるプロセス：Ptの不信・恐怖 → 治療同盟に訴えよ。
- ・Ptは抑うつや痛みから逃れる「魔法の治療」をつかもうとする
- ・複雑な転移関係を構築できるのは安全で、気取らない隔離された相談室でのみ
- ・ThとPtの両者にとって挑戦的なプロセス
- ・Th自身も汚染解除のプロセスを経験することが必要